

風景の中で ②



図書館長 井上 郷子

先回、このコラムのタイトル「風景の中で」に関連して、ジョン・ケー
ジのピアノ曲《In a landscape》について書きました。この曲が書かれ
た1940年代、ケージは、集中して、打楽器アンサンブルとプリペアド・
ピアノのための作品を書いています。

プリペアド・ピアノは、「普通の奏法(打鍵によって、ハンマーが弦を
打つ)で弾くとき、新しい音色と音高が生み出されるように、臨時に物
が(通常は弦の間に)付け加えられたグランド・ピアノ」* と定義され
ます。実際、ごく普通のグランド・ピアノを注意深くプリペアドするこ
とにより、数えきれないくらい多くの繊細な音色が得ることができます。
が、非伝統的な方法で扱うが故に、理解されないことが多い楽器であ
ることも事実です。私は、楽器を傷めることがないように、演奏者がピ
アノという楽器を知り、丁寧に扱っていくにはどうしたらよいかという
技術を得ていくことも大切だと考え、そのために学内外で様々な試み
を行なっています。

さて、ケージが1940年に書いた最初のプリペアド・ピアノ作品は
《バックスの祭》で、この曲では、演奏する前に、記譜されている12個

の音に対応する弦に、隙間ふさぎの布(フェルトで代用)、小さいボル
ト、ナットが付いたねじを挟み込んで打楽器的な音色を作り、演奏し
ます。ダンサー、シヴィラ・フォートの依頼を受け、彼女の踊りのため
の音楽として作曲されましたが、ケージが言うには「踊りのアフリカ
的な雰囲気を実現するために、打楽器アンサンブルを用いて書きた
かった。でも、会場が狭く、思っているように打楽器が設置できない。
ただ1台のグランド・ピアノを使って書くことを考えた」そうです。

プリペアド・ピアノはもちろん、ケージの創作の必然性から生まれ
たものですが、その発想は、師であったヘンリー・カウエルの影響を
受けています。指や手で直接弦に触れ、それをはじいたりミュートし
たりして音質を変化させる師の様々な試みに、傍で聴いていたケージ
が深い印象を受けている光景が目に見えそうです。プリペアド・ピ
アノの曲を書き続けた約10年の後、ケージの作風は「不確定性の時
期」へと変わっていきます。その必然性は何だったのか、じっくり考察
すると、そこに「ある風景」が見えてくるかもしれません。

*『ウェル・プリペアド・ピアノ』リチャード・バンガー著 近藤譲、ホアキン・M・
ベニテズ共訳 1978 全音楽譜出版社 請求番号●C32-950

資料の部屋 ②

図書館員
宇田川 もも

まず目に飛び込んでくるのは表紙の大きな骸骨。両手で持つほ
ど重たく分厚いこの本には、人類が紡いできた 8000 年分の「死
の美術」が詰まっています。本書は、死に関する 1000 点以上の
絵や写真を、「死の技術」「死を記憶する」など 7 つのテーマに
分けて収録した図録で、最初から順に読んでも、写真だけをパラ
パラ眺めても、どちらでも楽しめる 1 冊です。「メント・モリ」は、
本書によると「鑑賞しているあなたもいずれは死ぬのだと伝える
オブジェや芸術作品」のことを言うのだそう。ふんわりとしか知
らなかった言葉ですが、この訳はとてもしっかりきました。

死というものについて、マイナスのイメージを持つ人が少なく
ないと思います。不快、病的、気味が悪い、不吉だ…、など。著
者によると、このように考えられるようになったのはここ 150 年
ほどのことなのだそうです。死のとらえ方はどのように変わった
のか? その変化は何を物語っているのか? 「メント・モリ」とい
うモチーフが大昔から存在することの意味は? 本書はこうした壮

大な疑問について答えを提示するのではなく、そのまま読む人へ
問いかけ、考えるきっかけを作るような内容になっています。

ミイラや人骨などぎょっとする写真がたくさん含まれているの
で、苦手な方にはおすすりできません。私も得意な方ではありま
せんが、それでも怖いもの見たさで手に取ってみたいくなるような
魅力的な本です。著者が言うように、
人はいつでも心のどこかで「死を見
てみたい」という思いがあるのかも
しれません。『死の美術大全』は図
書館 3F 参考図書フロアの美術書の
棚にあります。本に囲まれた静かな
閲覧室でひっそり眺めてみてはか
がでしょうか?



『死の美術大全：8000年のメント・モリ』
ジョアンナ・エーベンシュタイン著 北川玲訳
河出書房新社 2018 請求番号●R70211S

宇田川 もも ● メキシコ「死者の日」をテーマにした映画「リメンパー・ミー」おすすりです! 「007スペクター」冒頭のパレードシーンも良いです。